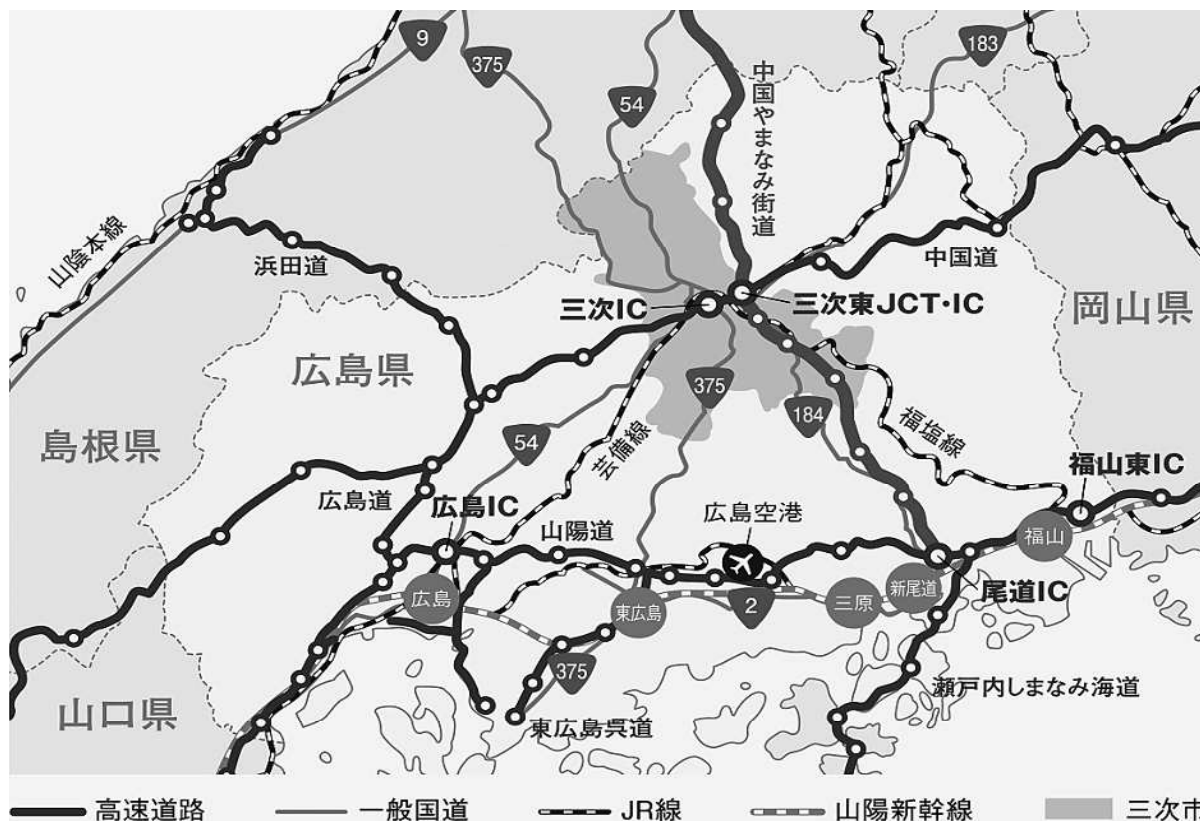


# 第1編 三次市の概要

## 1 地 理

三次市は、広島県北部の中国地方の中心に位置し、山陽側の広島・呉・三原・尾道・福山、山陰側の浜田・江津・大田・出雲・松江・米子などの各都市へ約50～80kmの位置にあります。交通網は、中国縦貫自動車道三次ICをはじめ、一般国道54号ほか4路線、県道45路線及び芸備線、福塩線が市内で交差し、平成26年度に全線開通した中国横断自動車道尾道松江線も含め三次市を中心として放射線状に広がる交通網を形成しています。



## 2 自 然

三次市の総面積は778.18km<sup>2</sup>で、広島県の総面積の9.2%を占めています。中国山地の南麓に位置し、中央部の市街地は大きな盆地を形成しています。

河川は、芸北の山々に源を発する江の川（可愛川）と、比婆・道後からの西城川、世羅台地からの馬洗川が市の中央部で「巴状」に合流し、下流では庄原市高野町からの神野瀬川を加え、「中国太郎」と別名を持つ中国地方最大の江の川として、中国山地を横断し日本海へ注いでいます。

気候について北部は、日本海側の影響を受けるため冷涼多雨で、時に冬期の積雪が1mに達することもあります。中心部から南部にかけては、概して温暖な気候といえます。

また、広島県北の水が集まるため秋から春にかけては川霧が発生し、それが盆地内に滞留することによって、山頂が島々に見えるいわゆる「霧の海」が現れます。

### 3 歴 史

三次市は豊富な川の水を利用した水稻耕作と、中国山地から産出する山砂鉄による「たたら製鉄」、加えて山陰と山陽を結ぶ交通の要衝という環境の中で、古くから栄えてきました。この地域に人々が住んでいた証拠として最も古い石器は、西酒屋町の下本谷遺跡で見つっていますが、時代は2万年以上前の氷河期に当たり、まだ大陸と陸続きだった頃のものです。

四拾貫町と向江田町にかかる陣山墳墓群（史跡）では、方形の墳丘の四隅が突出した特徴のある弥生時代の墳丘墓が発見されています。同様の墳丘墓が島根県、鳥取県、福井県などにも分布していますが、陣山墳墓群等が時期的に最も古いことから、三次盆地が起源であるという説もあります。

飛鳥時代の7世紀後半には備後国が成立していたことがわかっていますが、現在の三次市域にあたる三次郡、三谿郡及び甲奴郡の地域は大宝元年（701年）の大宝律令によって完成したとされており、三次郡の郡役所（郡衙）の場所は下本谷遺跡（県史跡）と考えられています。甲奴町地域は当初は葦田郡に属していましたが、後に甲奴郡として分割されました。

なお、寺町廃寺跡は、7世紀後半に建てられた古代寺院で、日本霊異記に記されている三谷寺と推定されています。

平安時代が終わり鎌倉時代に入ると、源氏の御家人が地頭として任命され、何代にもわたってこの地を治め、在地領主となりましたが、戦国時代に尼子氏からやがて毛利氏の支配下に入りました。

江戸時代には安芸・備後国は福島正則の領国となりますが、その後、浅野氏にかわり広島浅野藩に属しました。甲奴町の一部地域は福山藩領に属したのち天領となり、その後豊後中津藩の飛び地となりました。なお、三次町、十日市町などを含む市の北西部から南部の地域であった、三次郡は旧比婆郡の一部とともに三次浅野藩が5代にわたって治めましたが、同藩断絶後は本藩の広島藩に属しました。また、江戸時代を通じて、舟運や石見銀山街道などの街道が通る交通の要衝であり、和紙、鉄、牛などの特産物を中心に三次の市は活気にあふれていました。

明治22年（1889年）の町村制施行により、三次市域100余の町村が30余の町村に再編されました。三次郡は明治31年（1898年）に三谿郡と合併して双三郡となりましたが、昭和29年（1954年）に町村合併促進法に基づいて、三次盆地の中心部が三次市となって分離しました。甲奴町は上下町、総領町を合わせて甲奴郡のまま推移しました。

以後、合併・編入を重ねて、平成16年（2004年）4月1日には三次市、君田村、布野村、作木村、吉舎町、三良坂町、三和町及び甲奴町の8市町村が合併し「新三次市」が誕生しました。

### 4 人口と世帯数

令和3年4月1日の総人口は50,852人で、合併時の平成16年4月1日に61,823人であったのに比べて約17.7%減少しており、昭和60年以降少しずつ減少しています。

世帯数は令和3年4月1日が23,416世帯となっており、平成28年に比べて241世帯減少しています。一世帯当たりの人員は、昭和55年が平均3.3人であったのに比べ、合併時の平成16年4月が平均2.6人、令和3年は2.2人に減少し、高齢化率の上昇と併せ高齢者のひとり暮らしや高齢者のみの世帯が増えている状況がうかがえます。